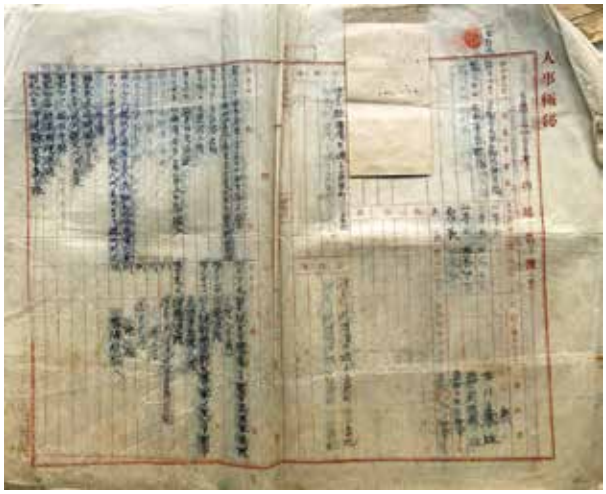
吉川歳雄氏従軍関係資料

（1）吉川歳雄氏近影
（1941［昭和 16］年）吉川一俊氏蔵

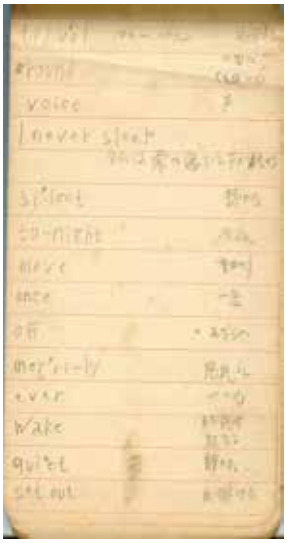
（2）哈爾浜での集合写真、後列左から 2 人目が吉川氏
（1942［昭和 17］年）吉川一俊氏蔵



（3）功績名簿（甲）
資料 No.20

（4）現認証明書
（1945［昭和 20］年） 資料 No.21

（5）女形に扮した吉川氏を描いた絵画
資料 No.22

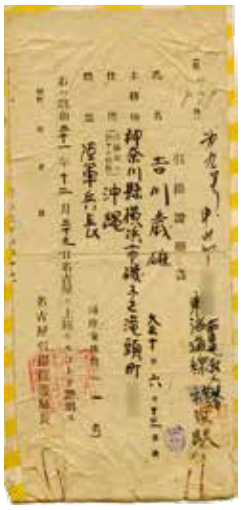


（6）捕虜生活でのメモ（英単語帳）
資料 No.22

（7）米兵から贈られた辞書
資料 No.17

（8）米兵から贈られた十徳ナイフ
資料 No.53

（9）引揚船乗船メモ
資料 No.23



（10）引揚証明書
資料 No.24

小島武雄氏従軍関係資料

（1）軍用救急車前の
小島氏
資料 No.33

（2）太原陸軍病院前の
小島氏
資料 No.33

（3）小島氏が勤務した太原陸軍病院
資料 No.33

（4）衛生兵の勤務風景写真
資料 No.33

（5）従軍看護婦との記念写真
資料 No.33

（6）従軍看護婦、戦友との
記念写真
資料 No.34

（7）山西省神奈川県人会創立総会記念写真
資料 No.33

（8）山西省神奈川県人会創立総会会場写真
資料 No.33

（9）佐久間隊集合写真

資料 No.33

（10）部隊誌
「佐久間隊の想ひ出」表紙

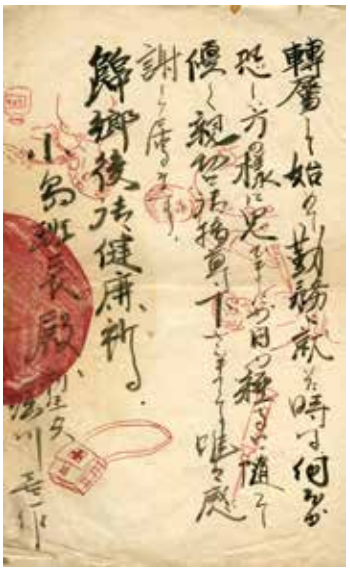
資料 No.25

（11）部隊誌「佐久間隊の想ひ出」

資料 No.25

（12）部隊誌「佐久間隊の想ひ出」

資料 No.25



（13）除隊する小島氏への
寄せ書き

資料 No.26

戦争捕虜となった横浜市民の記録
―吉川歳雄氏、小島武雄氏従軍関係資料紹介―

西村　健

● はじめに

戦後70年を過ぎ、戦争経験者から直接戦争体験を聞くことが困難になる中、戦時期の資料から得られる情報の価値は、より高くなっているといえる。横浜都市発展記念館では、横浜市民の戦時関係資料の寄贈を積極的に受け入れており、資料の概要について展示や出版物等で紹介してきた[1]。

今年度、寄贈を受けた資料には、沖縄県の宮古島で敗戦を迎え、米軍の捕虜となった吉川歳雄氏の従軍関係資料群（吉川一俊氏[2]寄贈）と、２度中国大陸に出征し、敗戦後に朝鮮半島の平壌郊外でソ連軍の捕虜となり、抑留生活を送った小島武雄氏の資料群（岩田みどり氏[3]寄贈）があり、戦争捕虜となった体験をもつ両氏の資料群が新たに収蔵資料として登録されることになった（寄贈資料全体の概要は文末の資料目録を参照）。両氏の資料とも、横浜市民の戦争体験を後世に伝える上で極めて貴重な資料群であるため、本稿では資料の概要と特筆すべき点について紹介していきたい。

なお、資料の引用にあたっては、原文通りを原則としたが、旧字は新字に改めた。句読点は、原文に付されている場合のみ記し、文書の区切りは一文字空きとした。

1．吉川歳雄氏の従軍関係資料

最初に紹介するのが、中国東北部に出征した後、沖縄県先島諸島宮古列島の宮古島に配属され、戦後は米軍の捕虜として収容所生活を送った吉川歳雄氏（1921－2011）の資料群である。本資料群には、従軍関係の公的文書が多数含まれるほか、捕虜生活時代に作成された資料が複数あり、戦時期から戦後の状況について詳細に把握できる。また、今回の寄贈資料には含まれないが、中国大陸で撮影された戦地の写真が吉川家に保存されている【口絵１頁参照】。このほか、吉川氏が逝去された2011（平成23）年12月の前月に孫の吉川智氏が吉川氏の戦争体験についてインタビューを行った証言記録データがあり、本章では寄贈資料と証言記録から、吉川氏の戦争体験について紹介していきたい。

吉川氏は1921（大正10）年に磯子区原町で製靴業を営む家に生まれ、根岸尋常小学校、同高等小学校を卒業した後、家業を継いだが、アジア・太平洋戦争開戦直前の1941（昭和16）年12月１日に徴集され、中国大陸へ赴くことになる。吉川氏の資料群には、兵士の記録として多くみられる「軍隊手帳」（資料No.[4]11）のみならず、軍歴の公的記録である「功績名簿」（資料No.20）【口絵１頁（３）】が存在し、戦場でどのような行動を取っていたのかが詳細に把握できる点が特徴としてあげられる。「功績名

1 近年筆者が紹介した戦時関係資料は、「伝単投下器」（臼井義幸氏寄贈）、「軍事郵便」（横川朱實氏寄贈）『ハマ発NEWSLETTER』（横浜都市発展記念館館報第26号、2016年４月）のほか、本稿で詳述する小島武雄氏の資料概略を記した「陸軍衛生兵の従軍関係資料」『ハマ発NEWSLETTER』（横浜都市発展記念館館報第29号、2017年10月）がある。
2 資料寄贈者の吉川一俊氏は吉川歳雄氏の長男。
3 資料寄贈者の岩田みどり氏は小島武雄氏の長女。
4 本章の「資料No.」は吉川歳雄家資料目録の「資料番号」に対応する。

簿」は兵士の功績を記録する文書で、昇進や叙勲はこの名簿の情報をもとに行われた。この情報は軍事機密であり、兵士の所属する中隊指揮班などで「人事極秘」文書として厳重に保管されていたが、敗戦と共にその多くが失われることとなった。吉川氏がなぜ本資料を入手できたのかは不明であるが、資料を寄贈された長男の吉川一俊氏によれば、「普通の人は持っていないものだ」ということを吉川氏から聞いたことがあるという。敗戦の混乱の中で、本来入手できない資料を何らかの方法で入手されたことが想像できる。

寄贈資料の「功績名簿」には（甲）と（乙）の二種類があり、（甲）には軍歴の概略が記載されている。本資料の情報をもとに【表１】に吉川氏の軍歴をまとめたが、ここでは、1941（昭和16）年に徴集された吉川氏が翌年１月10日に「歩三〇要員トシテ近歩四補充隊ニ入営」したことが記されている。「近歩四補充隊」とは、「近衛歩兵第四連隊補充隊」を意味し、当初吉川氏は近衛連隊の所属であったことがわかる。しかし、この措置は「歩三〇要員」、つまり「歩兵第30連隊」所属となることが前提であったと考えられる。同資料に拠れば、吉川氏は1942（昭和17）年４月２日に広島県の宇品港から大連港へ上陸しているが、翌３日に歩兵第30連隊への転属が決定されており、以後は同連隊の一員として軍歴を送ることになる。通常、横浜の市民は徴兵されると甲府歩兵第49連隊をはじめ、同連隊から派生した第149、210、220連隊などに配属される事例が多く見られるが、この点で吉川氏の軍歴はやや特殊であったといえるだろう[5]。この理由は、吉川氏が近衛兵として選抜されたことや、アジア・太平洋戦争開

【表１】吉川歳雄氏軍歴一覧

年月日	事項
昭和 17 年 1 月 10 日	歩三〇要員トシテ近歩四補充隊ニ入営
3 月 27 日	満州派遣ノ為東京出発大東亜戦役勤務開始
3 月 28 日	宇品港出帆
4 月　2 日	大連港上陸
4 月　3 日	関東州界通過
4 月　5 日	哈爾浜歩三〇着第五中隊編入
10 月 16 日	命陸軍一等兵
11 月 11 日	復帰下令
11 月 25 日	復帰完結
昭和 18 年 9 月 18 日	饒河守備隊交代ノ為駐屯地哈爾浜出発
9 月 24 日	東安省饒河県大代河着同日ヨリ饒河附近警備
昭和 19 年 6 月 26 日	臨時編成下令
6 月 30 日	饒河県大代河出発
7 月　1 日	編成完結
7 月 11 日	鮮満国境通過
8 月 22 日	沖縄県宮古島上陸
11 月 29 日	右大腿部皮下腫瘍ニテ宮古島陸軍病院ニ入院（平病）
昭和 20 年 2 月 14 日	治療退院
4 月 21 日	右大腿部側腹部火傷（第二度）ニテ宮古島陸軍病院ニ入院
9 月　2 日	治療退院

「功績名簿」（甲）（吉川歳雄家目録資料 No.20）より作成

5 横浜市民の徴兵先については、羽田博昭「兵士となった市民の戦争体験―都市横浜の戦争―」『横浜市史資料室紀要』（第７号、2017 年）を参照されたい。

戦直後の陸軍の作戦的要因が考えられるが、詳細については現在把握している資料のみでは不明であり、今後の課題としたい。

吉川氏が所属した歩兵第30連隊は新潟県高田市（現上越市）を本拠とし、日露戦争で多くの戦功をあげた歴史を持つ連隊であった。昭和期にも満州事変やノモンハン事件に参加するなど、歴戦の部隊であったが、吉川氏が配属された当時は、中国東北部の哈爾浜（現中華人民共和国黒竜江省ハルビン市）周辺の警備が主任務であった。吉川氏の「功績名簿」（乙）では、実際に吉川氏が担当した任務について記述されているが、1942（昭和17）年から翌年９月までは「哈爾浜附近ノ警備」、同年10月から1944（昭和19）年６月までは「饒河県附近ノ警備」（饒河県は現黒竜江省双鴨山市に位置する県）とのみ記されており、戦闘などに参加することはなく平穏な状況が続いていたことが推測できる。

しかし、この間も連合国軍との戦闘は熾烈を極めており、戦況は悪化の一途をたどり、沖縄本島への上陸が不可避なものとなっていた。このため、陸軍では大規模な編成替えが行われ、第30連隊が所属した第28師団は沖縄本島や奄美群島、先島諸島を守備範囲とする第32軍に編入されることになり、第30連隊は先島諸島の宮古島の守備に就くことになった。吉川氏の「功績名簿」では、1944（昭和19）年６月26日に臨時編成が下令され、同年８月22日に宮古島に上陸したことが記されている。宮古島の戦史をまとめた『先島群島作戦（宮古篇）[6]』によれば、当時の宮古島には、第28師団と独立混成第59、第60旅団および各種の部隊が上陸し、1944（昭和19）年12月には陸海軍あわせて約３万名もの大部隊が展開していた。これらの部隊は、島に存在する陸海軍の飛行場の守備が主任務であった。「功績名簿」（乙）には、宮古島上陸以降の吉川氏の任務の詳細が記されている。以下にその要約を記す。

昭和19年８月22日～10月９日
　宮古島付近ノ守備
　三小一分隊　軽機関銃手　陣地構築従事
昭和19年10月10日～10月13日
　南西空襲
　三小一分隊軽機関銃手　戦闘参加
昭和19年10月14日～11月18日
　宮古島付近ノ守備
　三小一分隊軽機関銃手　陣地構築従事
昭和20年２月14日～３月25日
　宮古島付近ノ守備
　三小一分隊軽機関銃手　陣地構築従事
昭和20年３月26日～４月20日
　天号作戦（一級戦）
　三小一分隊軽機関銃手　戦闘参加

ここからは、吉川氏が宮古島に上陸して以降、陣地構築の任務に連日就いていたことと共に、軽機関銃手として戦闘に参加していたことが把握できる。当時、大本営は連合国軍が宮古島に上陸することを想定していた。防衛研究所が所蔵する第28師団の「戦史資料[7]」によれば、同師団では宮古島の防御方針を以下のように定めていた。

第一　守御一般方針
一部ヲ以テ八重山列島主力ヲ以テ宮古列島ヲ防衛シ敵ノ攻撃ニ際シテハ堅固ナル防御施設ニ拠リ持久戦闘ヲ遂行シ敵ノ戦力ヲ破摧ス假令最後ノ一兵ニ至ルモ敵ヲシテ飛行場ノ利用及設定ヲ許サス
但シ宮古島ニ於テハ有力ナル部隊ヲ以テ堅固

6 瀬名波栄『先島群島作戦（宮古篇）』（先島戦記刊行会、1975 年）。
7「第 28 師団［戦史資料］」（簿冊「第 28 師団沖縄部隊史実資料」内文書）防衛研究所所蔵（請求番号：沖台 沖縄 038）。

ニ水際陣地ヲ占領シ主力砲兵ノ活躍及各種施設ト相俟ツテ敵ヲ水際ニ撃滅スル為最大ノ努力ヲ傾倒ス

比較的平坦な地形が多い宮古島では、連合国軍の上陸に対し、水際で撃退する方針を主とし、上陸後は高地の陣地に立てこもって「最後ノ一兵ニ至ル」まで、飛行場を守ることが義務づけられていた。吉川氏はこの作戦の遂行のために陣地構築に当たっていたことがわかる。この間、制海権と制空権は連合国軍に掌握されたため、島への補給は絶たれ、食料・物資不足とマラリヤが兵士達を苦しめた。吉川氏が所属した歩兵第30連隊第２大隊が戦後に記録した「戦史資料[8]」には、この状況について以下のように記されている。

給養
昭和十九年八月宮古島上陸以降翌二十年二月迄ハ概ネ順調ニ給養ヲ実施シ得タルモ三月以降空爆ノ愈々猛烈ヲ極ワムルト共ニ補給全ク杜絶ノ状況ニ入リ加ヘテ宮古島健在ノ目的ヲ達成センガ為メニハ貧弱ナル糧食ヨリ「喰延バシ」ハ必然的ニ実施セラレ五月以降ハ凡有ノ所在物量ヲ活用スルモ尚糊口ヲ僅カニ潤ルホスノ状況ニ至レリ
之レガ為三月以降ハ現地自活即作戦任務遂行ノ方針ノ基鋭意努力セルモ三月ノ成果ハ十月以降ニ於テ始メテ得ラルルノ状況ニシテコノ間ハ余リノ苦況ノ下ニ活動セリ〔中略〕
衛生
本島ハ「マラリア」地帯ニテ特ニ大隊ハ駐屯全期ヲ通シ「マラリア」ノ最汚染地ニ在リ
加ヘ給養ノ劣悪ノタメ「マラリア」性栄養失調症ニ依ルノ犠牲者逐次増加ヲ来シ遂ニハ全兵員ノ九〇％ハ「マラリア」ニ罹患スルノ止ムナキニ至レリ
然レドモ作戦任務ハ瞬時タリトモ遅延ヲ許サズシテ兵員ノ体力消耗ハ極度ニ達セリ〔後略〕

この資料からは、「功績名簿」では把握できない過酷な状況下で吉川氏が陣地構築の任務に就いていたことがわかる。吉川氏は生前、家族に「食べられるものは何でも食べた、カタツムリやヘビなどを食べた」と証言されており、食糧不足が特に兵士にとって苦痛であったことが想像できる。また、同資料には、第２大隊の死者について「直接戦闘ニ於テ死亡セルモノ僅少ニシテ主トシテ対空射撃部隊及飛行場補修作業部隊ニ於テ戦死者ヲ出ダセルノミ他ハ凡ベテ『マラリア』ヲ主体トセル戦病死ナリ」と記しており、10名の戦死者と110名の戦病死者が出たことを記録している。同大隊は597名で構成された部隊であったので、２割近い兵士が直接の戦闘ではなく、マラリアなどの病によって戦病死したことがわかる。珊瑚礁で出来た宮古島の高地を掘削する陣地構築作業は困難を極めたといわれ、栄養不足と疲労のため多くの兵士が病に冒されながら重労働を強いられた様子が想像できる。

当初の想定に反し、連合国軍は宮古島には上陸作戦を行わず、直接沖縄本島に上陸したが、島の飛行場および陣地には激しい空襲が連日続いた。前掲した第２大隊の「戦史資料」内の「敵機来襲状況」には、「昭和十九年十月十日以降毎連日数編隊ニヨル来襲アリタリ、特ニ三月下旬ヨリ沖縄作戦終了ニ到ル間熾烈ヲ極メタリ」と記されており、連日艦載機による空襲を同部隊が受けていたことが把握できる。特に日本陸海軍が沖縄防衛のために総力を挙げた「天号作戦」実施時には熾烈な戦闘が展開され、吉

8「第28師団歩兵第30連隊第２大隊［戦史資料］」（簿冊「沖縄方面部隊史実資料綴」内文書）防衛研究所所蔵（請求番号 沖台沖縄023）。

川氏も同作戦に参加していたことが「功績名簿」に記されているが、1945（昭和20）年４月20日で記録が途絶えている。これは、吉川氏が翌４月21日の空襲で重度の火傷を負い、以後敗戦まで宮古島の陸軍病院に入院することになったことによるものである。負傷の状況は、吉川氏が所属する第２大隊隷下の第５中隊が発行した「現認証明書」（資料No.21）【口絵１頁（４）】に以下の通り記されている。

一、受傷状況
昭和二十年四月二十一日二十一時頃沖縄縣宮古郡平良町東仲宗根添四七高地東側ニ於テ横田中尉指揮ノ許ニ陣地構築作業ニ従事中敵ノ空襲ヲ受ケ全員直チニ肉攻壕ニ待避セリ　偶々敵ノ曳光弾海軍ニテ集積中ノ「ドラム罐」ニ命中忽チ附近一帯火災ヲ生シタル際右大腿部側腹部火傷ヲ（第二度）ヲ受ケリ

陣地構築中に海軍が集積した燃料入りのドラム缶に機銃弾が命中して発生した火災のために、吉川氏が受傷した様子がここでは記されているが、吉川氏はこの時の様子を孫の吉川智氏に対し以下のように述べている。

壕を掘ってたら、そしたら上に飛行機に使うドラム缶があって焼夷弾がぶつかって、ドラム缶から石油が壕に流れ込んできた。表に出なければ死んでしまうが、表に出るためには火の中を通り抜ければならないわけ、軍服をさっと脱いでパタパタ叩いて上半身は少しの火傷で済んだけど、足は脚絆を巻いていたため火が燃え移り下半身が大やけどになった。それでもう軍医が体の三分の一が焼けているからこれはもうだめだという宣告を出して、それで入院したんだよ。

「現認証明書」の情報と吉川氏の証言から、負傷時の状況が詳細に把握できる。吉川氏の証言によれば、負傷後、島の小学校に設置された陸軍病院に入院し、軍医の言葉に反して一命を取り留めるが、ここも攻撃対象となって機銃掃射を受けるなど、数度にわたり命の危険にさらされる経験をされたという。しかし、沖縄戦が６月に終了した後は、宮古島に対する空襲も少なくなり、吉川氏は本病院で療養中に、敗戦を迎えることになる。敗戦から復員までの状況について、第２大隊の「戦史資料[9]」は以下のように記している。

七、終戦ヨリ帰還迄ノ行動ノ概要
終戦ヨリ概ネ十月迄ハ兵器奉還埠頭作業築城復旧作業ニ終始ス
此ノ間現地自活保育衛生ニ重点ヲ指向徹底ス
十一月以降ハ現地自活保育衛生ニ重点ヲ依然指向スルト共ニ此ノ間復員準備ノ完璧ヲ期セリ
二十一年一月二十五日米船「ジャクソン」号ニ乗船宮古島ヲ出発同月三十日全員無事浦賀ニ上陸セリ

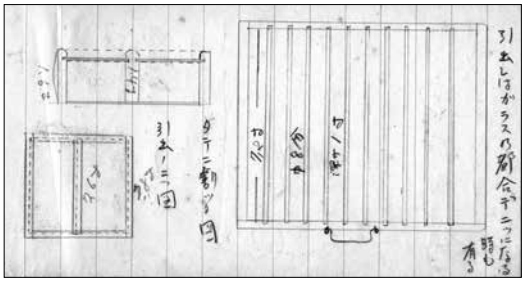
この記述からは、兵器の処分や戦争被害の復旧作業を行い、米船で全員が復員したことが把握できるが、吉川氏は米軍の作業援助のために捕虜として沖縄本島に送致されることになった。『先島群島作戦（宮古篇）』には、歩兵第３連隊や独立歩兵大隊などから約２千名が沖縄本島に送られた事が記されているが、歩兵第30連隊の記録[10]では、連隊長をはじめ部隊員の多くが1946（昭和21）年１月までに帰還を果たし

9 同前資料。
10「第 28 師団歩兵第 30 連隊［史実調査参考資料報告］」（簿冊「沖縄方面部隊史実資料綴」内資料）防衛研究所所蔵（請求番号 沖台 沖縄 023.025.026）。

ており、戦傷を負って労役に不向きな吉川氏が、沖縄本島行きの人員として選抜されたのが不自然なケースであったことがわかる。この理由について、吉川氏は以下のように証言している。

本当はおじいちゃんはすぐ国内へ、松葉杖付いてたから帰れるはずなんだよ。だけど一定の人数を捕虜として出さないと、むこうで使役に使うんだから。でも兵隊の上の人は誰でも捕虜になるのは嫌だから、弱い人間に「おまえ達、苦労して身体検査に通ればすぐに内地に帰れるから、なるべくそういうのを隠して身体検査を受けよ」といった。身体検査といっても大したものではないから、こっちも帰りたいから必死に、松葉杖をつかなきゃ歩けないけど松葉杖を使わないで歩いて、それで沖縄にいったんだよね。そこで向こうにいって向こうの軍医がちゃんとした身体検査を行うんだよ。そしたら「お前はなんでこんなにひどいのに帰らなかったんだ」というからこれこれと事情を話したら、「日本の兵隊は酷いことをする」といって、それでお前は仕事を出来ないんだから治るまで養生しろといって、アメリカ軍の薬は豊富だよ、それでぐんぐん良くなったんだよ。

この証言では、本来は復員が優先された負傷兵であったにもかかわらず、上官の助言で怪我を隠して身体測定を受けた結果、かえって沖縄本島に送られることになったことが語られている。この上官に悪意があったのかどうなのかは定かではないが、吉川氏は復員後も部隊上層部には不信感を持ち、幹部ばかりが集まる部隊の戦友会などにも出席することがなかったという。これに対し米軍については「国際法を守る国」、「アメリカという国は人の命を大切にする国だ」との感想を家族に話すなど、比較的好意的な感情を抱いていたことが推測できる。吉



【図 1】吉川氏作成の引出設計図

川氏は宮古島の陸軍病院よりも米軍の収容所の方が、医療物資が豊富で食料も充分に与えられたことを証言されており、米軍から好待遇を受けたことが、このような評価につながったものと考えられる。

宮古島から沖縄本島に送られた兵士は、嘉手納や石川、小禄、小野山の収容所などに収容されたが、資料から吉川氏は嘉手納収容所に収容されたことが推測できる。吉川氏は当時の様子について、証言を残しているほか、収容生活のなかで使用していたメモ帳（資料No.22）などを保存されており、当時の様子を知ることが出来る。吉川氏の証言によれば、火傷が治癒したのち、米兵から「お前は何ができるんだ」と聞かれ、「カーペンター（大工）」だと答え、米兵の宿舎となるカマボコ兵舎の建設に携わることになったという。メモ帳には、この時期に吉川氏が設計したと思われる引出しの設計図【図１】が記されており、米兵の生活に関する様々な家具などを作る作業に従事していたことがうかがえる。また、捕虜生活の中で米兵とのコミュニケーションを積極的に図っていたことが以下の証言から把握できる。

捕虜の時に必要な言葉ってあるわけよ、それ以外の言葉は出てこないわけ、だからカーペンターの仕事のことなんかを、見張りの兵隊と話が出来ればいいわけよ。他の人間は一生懸命仕事してるわけよ、だけどおじいちゃんは通訳として他の兵隊と話して時間を潰し

ていたんだよ。

それからしばらくして内地に帰るという噂が出たんだよ、そしたら監視する兵隊が真面目な兵隊から帰すというんだよ、じゃあ一生懸命にならなきゃと仕事したんだよ。そしたらぽつぽつ帰される兵隊が出て来たんだよ。それで監視役の兵隊に「これじゃ約束が違う、一生懸命に真面目に働いたのに、俺は真面目じゃないのか」といったら、「真面目な兵隊をみんな帰したら作業が成り立たない」と言うんだよ。そしておじいちゃんは最終便なんだよ。

この証言からは、吉川氏は通訳として積極的に監視役の米兵と交流していたことがうかがえる。吉川氏のメモ帳には、自筆の単語帳【口絵２頁（６）】が記載されているほか、寄贈資料の中には米兵から贈られた英日の会話集をメインとした辞書（資料No.17）【口絵２頁（７）】があり、複数の書込みがなされていることから、これらの資料を通して吉川氏が英語を習得し、米兵との意思の疎通を図っていたことが推測できる。このほかにも米兵から贈られた十徳ナイフ（資料No.53）【口絵２頁（８）】もあり、良好な関係が築かれていたことがわかる。また、吉川氏の他にも、様々な技能を持った捕虜仲間がおり、酒を造って黒人兵などを招いて宴会を開いていたという証言を家族に話されたという。このような資料や証言から、比較的自由な環境下で捕虜生活が送られていたことが想像できる。

米兵以外にも、吉川氏は収容所仲間との交流にも積極的に取り組んでいた。収容所生活の終盤に、吉川氏をはじめとした有志達が「演芸隊」を組織し、歌や芝居などで捕虜達の無聊を慰めていたのである。吉川氏は「お祭りお吉（よし）」という名で女形を演じ、収容所内で人気を博していた。米軍の捕虜となった兵士達が演芸会を定期的に開いていたことは、捕虜の経験を持つ作家、大岡昇平の『俘虜記』をはじめ、捕虜経験者の体験記にも複数記録されている。このうち、吉川氏と同じ歩兵第30連隊第２大隊に所属し、小野山収容所で捕虜生活を送った宮永次雄氏は、同収容所内に「那覇劇場」という劇場が設置され、女形を演じる役者が人気を博していたことを以下のように記している。

何等の公的な娯楽を持たぬP.W（筆者註：Prisoner of Warの略、戦争捕虜）たちの人気はすばらしかった。作業の帰りに少しずつ持って来た色ペンキで、女形の着物に綺麗な花模様が描かれ、帯には金色さえ塗り散らされた。〔中略〕「お光」と呼ばれる女形は、いつとはなく柵内の人気女優（？）に成り上って、彼女（？）は知らぬ男たちから、さかんに煙草をもらったり、果物の缶詰にありついたりした。P.Wの間に「いかれる」という言葉が流行り出したのはこの頃からだった。〔中略〕いかれた男たちは、その愛する女形のために、花輪を作って舞台に捧げたり、M・Pの眼をかすめ無理をして柵内に持ちこんだ貴重な煙草を五箱も七箱も、舞台の彼女（？）に投げたりして、奇声を上げた[11]。

宮永氏の記録からは、このような演芸会が沖縄各地の収容所で開催され、捕虜生活の貴重な娯楽になっていたことに加え、特に吉川氏のような女形を演じる役者が収容所内のアイドル的存在になっていたことが想像できる。吉川氏のメモ帳には、女形姿の吉川氏を描いた絵画【口絵２頁（５）】が貼り付けられているが、「那覇劇場」の女形と同様に女性用の着物やかつらを付けた姿で描かれており、嘉手納の収容所でも、仲間達が苦心してこれらの衣装を揃えたこ

11 宮永次雄『沖縄俘虜記』（南方捕虜叢書２、図書刊行会、1982 年、雄鶏社昭和 24 年刊の再刊）167 ～ 170 頁。

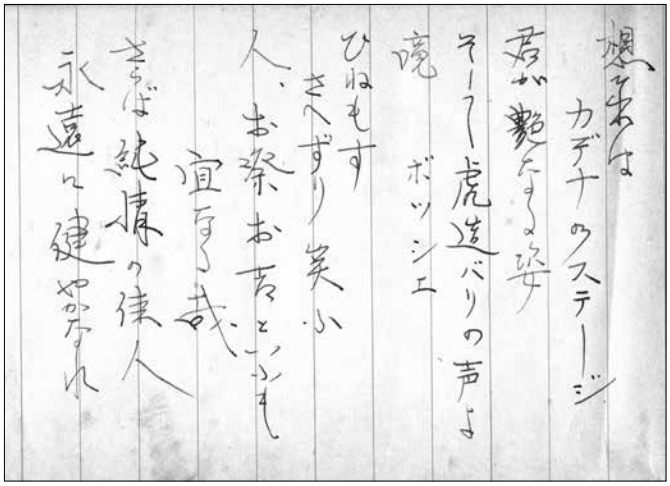
とが推測される。メモ帳には、吉川氏よりも先に復員した収容所仲間からのメッセージが複数記載されており、収容所での吉川氏の活躍を偲ぶことが出来る。その一部を以下に記載する。

捕虜仲間からのメッセージ（1）【図２】

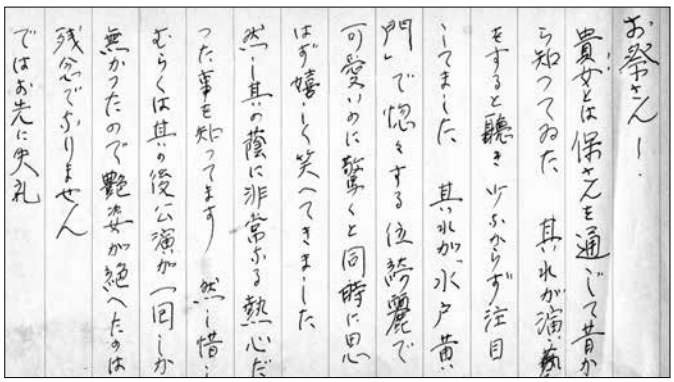
想ひ出は　カデナのステージ
君が艶なる姿
そして虎造バリの声よ
噫　ボツシエ
ひねもす　さへずり笑ふ
人、お祭りお吉といふも　宜なる哉
さらば純情の佳人
永遠に健やかなれ

捕虜仲間からのメッセージ（2）【図３】

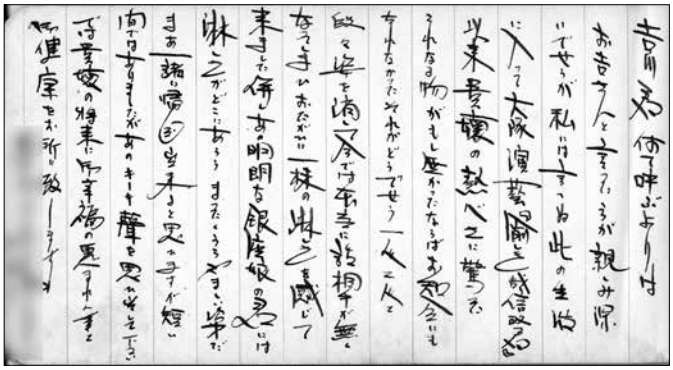
お祭りさん！
貴女とは保さんを通じて昔から知っていた
其れが演芸をすると聴き少なからず注目してました　其れが「水戸黄門」で惚々する位綺麗で可愛いのに驚くと同時に思はず嬉しく笑へてきました
然し其の蔭に非常なる熱心だった事を知ってます　然し惜しむらくは其の後公演が一回しか無かったので艶姿が絶へたのは残念でなりません



【図２】捕虜仲間からのメッセージ（1）



【図３】捕虜仲間からのメッセージ（2）



【図４】捕虜仲間からのメッセージ（3）

ではお先に失礼

捕虜仲間からのメッセージ（3）【図４】

吉川君なんて呼ぶよりはお吉さんと言った方が親しみ深いでせうが私には言へぬ此の生活に入って大隊演芸『愉しき哉信政君』以来貴嬢の熱心さに驚きこれなる物がもし無かったならばお知合にもなれなかった　それがどうでせう一人二人と段々姿を消して今では本当に話相手が無くなってしまひおたがひに一抹の淋しさ感じて来ました　併しあの明朗な銀座娘の君には淋しさがどこにあろうまったくうらやましい次第だ　まあ一緒に帰国出来ると思ひますが短い間ではありましたがあのキーキ聲を思ひ出して下さい　では貴嬢の将来に御幸福の恵まれん事と御健康をお祈り致します

捕虜仲間からのメッセージ（4）

お祭りお吉さんに別れの筆を執るなんてどうも不自然でならない、一緒に帰る僕であれば名古屋の埠頭でしっかりと手を握って何も云はずに別れた方が格にあって、良いような気がする

それとも君は僕をおきざりにして行く気かな！！

故郷の土を踏むころは秋祭りも終って焚火の恋しい頃でしょう。嘉手納ではお世話になりました。君の舞姿、銀座娘や茶屋の女、純真な様で何処からか押さへ切れない艶な姿、お祭りお吉とは実に良い名前だ　二度とあんなことは出来ないだけに良い此の上もない思ひ出です

では御身体大切に

捕虜仲間からのメッセージ（5）

沖縄で…

与へられたP.Wと謂ふ空な貝殻。私達は宿借りの様な生活を十余ヶ月　その間に苦しい事、愉しい事、而し今、門出の私に印されているものは、みづ〳〵しい「うるほい」丈

想ひ出の中より反省の奮起の何物かをつかみ度ひ

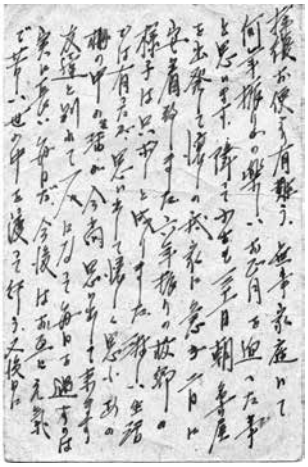
そんな甘い事を考へている私。

果して故国の激しい現実が何の程度、それらのものを受け容れてくれるか判りませんが・・・

若い者と、大人たちに如何にさげすまれ様と、私の一生にも宮古のカデナのひと、きがあったのだと振り返り〳〵「東の道」を歩みます。ひとりよがりの事許り。

貴兄の御健勝を祈ります。

再横浜ニテ会の日迄



【図５】
城戸伝氏からの手紙

このようなメッセージから、無味乾燥な捕虜生活の中で、「お祭りお吉」として活躍した吉川氏の存在の大きさがうかがえる。メモ帳には、これらのメッセージの他に収容所仲間の住所や居住地の地図などが複数記載されており、復員後もこれらの人々との交流があったことが推測できる。資料には吉川氏が復員後に収容所仲間に出した手紙の返信が複数含まれている。このうち愛媛県の仲間からの返信は以下の通りである。

城戸伝氏（愛媛県在住）からの手紙
（資料No.30）【図５】

発送年：昭和22年１月14日（消印）

拝復お便より有難う　無事家庭にて何年振りかの楽しいお正月を迎へた事と思います
降って小生も三十一日朝名古屋を出発して懐しの我家に急ぎ二日に安着致しました。六年振りの故郷の様子は只ボーと成りました。淋しい生活では有ったが思い出して懐しく思ふ
あの柵の中の生活が今尚思い出して来ます
友達と別れて一人になって毎日を過すのは実に長い毎日だ　今後はお互に元気で苦しい世の中を渡って行う　又後日に

この手紙からは、復員して家族と再会したことを喜びつつも、仲間達との日々を懐かしむ心情がうかがえると共に、収容所内では深い関係性で仲間同士が結ばれていたことが想像できる。吉川氏の復員は証言によれば一番最後で、名古屋引揚援護局が発行した「引揚証明書」（資料No.24）【口絵２頁（10）】の記録から1946（昭和21）年12月29日に名古屋港に上陸したことが明らかになっている。復員後の吉川氏は家族が戦時中に疎開した港北区（現緑区）中山町に移り、製靴業に従事した。

1941（昭和16）年に出征し1946（昭和21）年に復員するまでの約５年間の吉川氏の軍隊生活に関する一連の寄贈資料群は、宮古島での戦闘記録や米軍の収容所時代の記録など、横浜市民が体験した戦争の実情を知る資料が多く含まれている資料群であるといえる。吉川氏の所属した部隊の資料や捕虜収容所の記録の収集を継続して行い、今後より多くの情報を資料から引き出していきたいと考える。

２．小島武雄氏従軍関係資料

次に紹介するのは、1918（大正７）年に横浜市神奈川区（現港北区）小机町に生まれ、陸軍衛生兵として戦地に２度赴き、戦後ソ連軍の捕虜となった小島武雄氏（1918－1995）の資料である。小島氏は1939（昭和14）年に徴集されて1942（昭和17）年11月に現役兵としての兵役を終え、無事帰国するが、戦局が悪化した1944（昭和19）年４月に臨時召集を受け、再度出征する経歴を持つ。小島氏の資料群は、一度目の出征時における任務地であった山西省太原での陸軍病院勤務時代の写真や所属部隊の記録が複数存在することに加え、２度目の出征時においソ連軍の捕虜となり、帰国の際に先に復員した捕虜仲間から小島氏の家族に無事を伝える書簡が多く含まれていることが大きな特徴といえる。本章ではこの２点を中心に資料の紹介を行いたい。

小島氏の軍歴は、戦後に小島氏が記した軍務関係の「履歴書」（資料No[12].1）によってその詳細を知ることが出来る。本資料には「軍隊手帳焼却に付き細部不明」と記された付箋が貼付られており、小島氏の記憶に基づいて記されたものと考えられるが、出征から復員までの部隊の転属や昇級などの情報が細かく記載されており、特に敗戦から復員までの抑留時代の情報が複数記載されているため、氏の軍歴を知る上で有用な資料といえる。本資料の内容を【表２】

【表２】小島武雄氏軍歴一覧

年月日	事項
昭和 14 年 1 月 10 日	現役兵トシテ第三師団歩兵第十八連隊ニ入隊
4 月	陸軍衛生一等兵ニ進級
4 月	北支派遣ニヨリ神戸港出港
4 月	北支塘沽ニ上陸、北支太原陸軍病院ニ到着
昭和 15 年 3 月	陸軍衛生上等兵ニ進級
9 月	陸軍衛生部下士官候補者トシテ北京衛生部下士官教育隊ニ入隊
昭和 16 年 1 月 9 日	陸軍衛生兵長ニ進級、現役満期除隊
1 月 10 日	臨時召集ニヨリ太原陸軍病院付陸軍衛生伍長ニ任官
昭和 17 年 3 月 1 日	陸軍衛生軍曹ニ任官
11 月	内地帰還ニヨリ朝鮮金山港出港門司上陸
11 月	東京第二陸軍病院到着、召集解除
昭和 19 年 4 月 25 日	臨時召集ニヨリ東部（千葉県市川）部隊ニ入隊
5 月	北支派遣ノタメ博多港出港
5 月	朝鮮釜山港上陸
11 月	北支新郷陸軍病院到着
昭和 20 年	北支北部隊ニ転属
7 月	本土防衛要員トシテ朝鮮京城軍司令部転属
7 月	平壌防衛司令部ニ転属、独立野砲十連隊付
8 月 1 日	陸軍衛生曹長ニ任官
8 月	朝鮮秋乙ニテ武装解除
9 月	捕虜収容所（三合里患者収容所）ニ収容
昭和 22 年 2 月	興南捕虜収容病院勤務
3 月	ソ連「ナホトカ」到着
5 月 15 日	ソ連ナホトカ出港、舞鶴上陸、召集解除

「履歴書（軍務関係）」（小島武雄家資料目録資料 No. 1）より作成

12 本章の「資料 No.」は小島武雄家資料目録の「資料番号」に対応する。

にまとめたが、これによれば小島氏は、日中戦争勃発後の1939（昭和14）年に徴兵されて第３師団歩兵第18連隊に入隊。同年４月に中国の華北地域に出征し、山西省の太原陸軍病院に衛生兵として1942（昭和17）年まで勤務したのち、最初の兵役を終え、内地に復員したことが把握できる。小島氏が所属した第18連隊は愛知県豊橋市に本拠地を置く連隊で、吉川氏と同様、横浜市民が多く所属した甲府連隊関係の部隊に所属していないことが注目できる。

小島氏の軍歴の特徴は、徴兵当初から衛生兵として訓練を受けていたことにある。衛生兵とは、軍隊において医療に関わる任務に従事する兵士のことを指し、陸軍病院で勤務する衛生兵には、看護師レベルの看護学の知識や技術の習得が求められた。当時の衛生兵の立場と教育内容については、平和祈念事業特別基金が編纂した『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦』に所収されている、1942（昭和17）年８月に徴兵され衛生兵となった和田富海男氏の回想録からその内容を知ることが出来る。

> 昔から兵隊達の揶揄言葉に、一にヨーチン（衛生兵）二に喇叭（喇叭手）三に炊事の常当番（炊事賄の兵隊）それより良いのが鳩ポッポ（通信隊の伝書鳩）もう一つ良いのが犬ワンワン（要人警護の軍用犬係）と言って、軍人として衛生兵は一番楽なように言われていましたが、真実はさにあらず。等身大の人体解剖模型を使って、外科的学科、損傷、疾患、皮膚の形成、筋肉及び骨格等々の応急処置、特に骨折に対留守援木（助木）、三角巾の使用方法、戦場における傷者の移送方法など。次に弾丸・爆薬等の破片除去、消毒法（破傷風・壊疽・敗血症）等などでした。
>
> また、内科的教育は、血流について大動脈大静脈・心臓機能・左右心室心房・肺は右肺三葉、左肺は二葉と、各臓器の名称から働きまで勉強させられました[13]。

和田氏の回想からは、兵隊の中では一番楽な兵科と揶揄されているが、教育内容は高度な医療知識の習得が求められる厳しいものであったことが把握できる。資料の寄贈者である岩田みどり氏によれば、小島氏は農家の家に生まれ、最終学歴は当時一般的であった尋常小学校卒であったため、医療の知識などは全くなかったのではないかと推測されている。小島氏は入隊後の教育で、短期間にこれらの知識を習得していったと考えられる。寄贈資料には、衛生兵の勤務状況が把握できる写真（資料No.33）【口絵３頁（４）】が複数あり、従軍看護婦らと共に撮影された記念写真（資料No.33,34）【口絵３頁（５,６）】も確認できる。小島氏は前線に赴く部隊に同行する衛生兵ではなく、陸軍病院で勤務する衛生兵であったため、より高度な薬学や看護学の修得が求められたものと考えられる。写真資料には歯の治療を行う小島氏の姿が撮影されたものもあり、多岐にわたる看護技術の習得が戦地でなされていたことが推測される。

小島氏が勤務した太原陸軍病院は、日中戦争勃発後、1937年（昭和12年）９月から11月までの間に行われた太原作戦の激戦を経て日本軍が占領した山西省の省都、太原に存在した陸軍病院である。小島氏の資料群には、太原陸軍病院を撮影した資料も多く含まれている。太原陸軍病院は1932年（昭和７）に設立された「川至医学専科学校」の建物を接収して開設された病院で、写真資料からも校名が確認できる（資料No.33）【口絵３頁（３）】。また、資料には

13 和田富海男「第一線の衛生兵」平和祈念事業特別基金編『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦』（第 11 巻 [兵士編]、平和祈念事業特別基金、2001 年）176 ～ 177 頁。

太原の街並みを写した写真資料が複数存在するほか、1942（昭和17年）に山西省で結成された神奈川県人会の記念写真（資料No.33）【口絵３頁（７，８）】があり、遠い戦地で同郷人同士が助け合って生活していた様子が偲ばれる。

小島氏が所属していた部隊は、佐久間質隊長が率いる「乙第一八三五部隊佐久間隊」であるが、同部隊の活動については、部隊が発行した部隊誌「佐久間隊の想ひ出」（資料No.25）【口絵４頁（10～12）】が残されており、その詳細を知ることが出来る。本誌は佐久間隊が配置換え等の理由で解散されることを記念して作成されたと考えられる資料で、隊員の名簿、隊の活動記録、部隊員の隊に対する感想記、部隊員による詩、和歌、文芸作品など、様々な内容が記されているほか、記念写真も38点含まれている。隊の名簿では、横浜市磯子区出身の佐久間隊長と小島氏をはじめ、神奈川県出身者が９名（内横浜市出身者５名）存在したほか、新潟県５名、東京府４名、山梨県３名、福井県３名、滋賀県２名、千葉県１名と全国各地から徴兵された衛生兵が同部隊に所属していたことがわかる。本資料には小島氏が寄稿した文章はないが、部隊の雰囲気を知ることのできる文章が多く掲載されている。このうち衛生兵勤務の活動と気概を記した以下の文章を紹介する。

兵営ハ苦楽ヲ共ニシ死生ヲ同ジウスル軍人ノ家庭デ有ル事ハ示サレテ有ル通リ　入隊前迄ハ真誠ナキ人間ガ輝ク甲種ノ命ヲ受ケテ一度軍隊ニ入ッテ一ツ釜ノ飯ヲ食ヒ親シイ兄弟ノ仲トナルノデアル　家庭ニ居ル時ニ「他人ノ飯ニ骨ガアル」ト云ハレタガ自分ノ様ナ不真面目ナ人間デモ今デハ国家ノ一命ヲ双肩ニ負フ衛生部員ナリ　何処ノ県ノ何処ノ郡ノ何処ノ村ノ戦友ガ最前線ニテ負傷シ或ヒハ病ニ浸サレテ病院ニ収容サレ其ノ看護ニ治療ニ一生懸命ニ働クハ我等ノ任務ナリ　毎日注射器ニ体温計ニ鑵子ニ軍医殿ノ命ゼラレタ凡ユル検査ニ実行報告ヲシテコソ初年兵時代ニ教ヘラレタ畏レ多イ事デアルガ陛下ノ赤子ノ看護ガ出来ルノデアルト思フ　即チ長イ間ノ病床生活カラ解放サレ今迄籠ノ鳥テ有ッタ戦友ハ再ビ軍服姿ニ身ヲ固メテ新シキ精神ヲ打込ンデ、永ラク御世話ニナリマシタト正門ヲ出テ行ク姿ヲ見テアレガ軍医殿ヤ衛生兵ノ汗ノ賜物ト思ヘバ一種ノ喜ビト共ニ何カ其ノ感激ヲ知ラズニハ居ラレナイ

大体衛生兵ノ仕事ト云フモノハ本科ト比べ華々シイコトハナイガ軍隊ニ於テハオ母サン役ノ軍人ダ、一命ヲ救フノダ！張リ切レ尚重傷患者ノ看護ニ当タリテハ特別食ヤ肝臓食、黄胆食ニ玉子焼、食塩注射ニ皮下注射、体温脈拍、呼吸迄学ンダ学術科デ働クノデス

仕事ハ多イガ人ノ目ニハ見ヘヌ又本科ノ兵隊ガ銃ヲ握ッテ最前線ニ働ラクト同ジダガ我等衛生部員ハ次カラ次ヘト戦友ノ病症ヲ治療シテ前線ニ送ルノダ　一言ニ各部隊カラ聞クニ衛生部員ハダラシガナイト云ハレルガ　何等立派ナ軍人デス　戦友ノ病気ヲ治シテ再ビ御奉公出来ルヨウニスルノデハナイカ　又不幸ニモ我等ノ戦友ハ足ヲ失シ手ヲ失シテ郷里ニ帰リユク者モアルダロウ―　尚災史ガアッテ桜花咲ク靖国ノ社頭ニ行クモノモアルダロウ

了リ

本文章からは、「一にヨーチン、二に喇叭」と戦闘部隊から揶揄された衛生兵がどのような気持ちで任務に就いていたのかを推測することが出来る。「オ母サン役ノ軍人」を自負し、専門知識を磨いて戦傷病者を治療していた当時の衛生兵の気負いがうかがえる点が興味深い。また、このような真面目な記述以外に、任務外の娯楽についての記述が多いことも本資料の特徴である。特に多く記述されているのが週に一度あった「庭球日」に関するもので、部隊の庭球場でのテニス大会について以下のような感想を兵士が記録している。

我れは昨年八月佐久間隊に勤務する事になった　佐久間隊に来て病棟勤務伝染病棟勤務である　我れは薬室勤務出であった　今度は薬りを混ぜるやうな訳にはいかぬ
二三日は頭をいためながら一生懸命看護婦の云ふ通りになって働いた　十日、二十日の月日が流れた　面白い娯楽も始り　今より勤務に楽しみが出た　早く一日の勤務を終了致し庭球場まで進んだ　庭球日は一週間に一度土曜日に試合スル事になった　其の試合には賞品も出る　何事も勝負に負けぬと我れは張切つた　一ヶ月の練習では勝目がなかった或る時は看護婦と試合した、物凄い我れの「サヴ」だ!!、足を上げて「いまやるぞ待っていろ！」速い、切れた、目が廻る我れの足上げ「サヴ」の人気は一方ならぬものとなった　新しき分病室が五月の半ばに出来上り移ることになった
同じく庭球場が出来て今では人気者の我れの足上げ庭球と笑はれるやうになった

終り

この記述からは、勤務よりもテニスを優先する兵士の本音が垣間見え、部隊員同士の関係性が良好であったことがうかがえる。本資料には部隊で飼っていた犬の「チイ公」や部隊のマスコットのヒヨコ「ピヨチャン」に関する記述もあり、小島氏が最前線の殺伐とした状況とは異なる穏やかな日々を太原で過ごしていたことが想像できる。

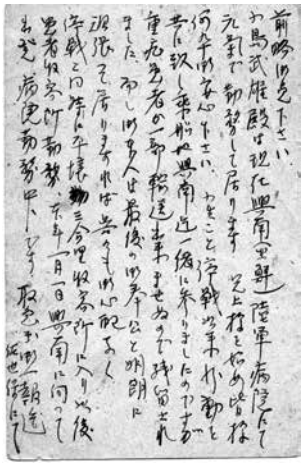
小島氏が召集解除され、内地に帰還する際には、同部隊員から寄せ書きが贈られている（資料No.26）【口絵４頁（13）】。ここでは、「格別なる御指導有難度御座いました後は新人の手で？帰郷後の御奮斗をば祈りつゝ」、「転属して始めて勤務に就いた時は何だか恐しい方の様に思ひましたが日が経るに随って優しく親切に御指導下さいまして唯々感謝して居ります」など、親身な指導を部下に行っていた小島氏の姿がうかがえる。小島氏は1942（昭和17）年11月に現役兵としての兵役を終え、無事帰国するが、最初の兵役は比較的平穏なものであったといえるだろう。

復員後の小島氏は、帰国後は東京芝浦電気株式会社（現株式会社東芝）に勤めるが、戦局が悪化した1944（昭和19）年４月に臨時召集を受け、再度出征することになる。「履歴書」によれば、小島氏は東部軍に編入された後、大陸へ出征し河南省の新郷陸軍病院で勤務する。この後、戦局が最終局面を迎えた1945（昭和20）年７月に本土防衛要員として朝鮮軍管区司令部や、平壌防衛司令部に配属され、最終的に独立野砲10連隊の所属となって、現朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の平壌市郊外の秋乙で敗戦を迎えることになる。

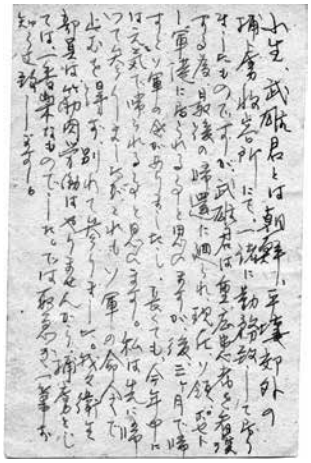
ソ連軍は1945（昭和20）年８月９日よりはじまる侵攻作戦によって中国東北部に攻め入り、日本軍は大きな被害を受けるが、朝鮮半島の平壌周辺ではソ連軍との戦闘が行われなかったため、小島氏は戦闘被害を受けることを免れる。しかし、秋乙でソ連軍による武装解除を受けた後、ソ連陸軍直轄の三合里収容所（現平壌市寺洞区域大院里）に収容され、同所や秋乙の収容所に設置された診療所で抑留生活を送ることになる。これらの収容所は当初、シベリアなどに日本軍捕虜を送る拠点として機能していたが、1946（昭和21）年より、厳しい抑留生活で衰弱した患者を受け入れる施設へと変化する。

三合里収容所の資料や証言記録をまとめた三合里収容所小史編集委員会編『三合里収容所小史[14]』

14 三合里収容所小史編集委員会編『三合里収容所小史』（三合里戦友会発行、1995 年）、なお同収容所で亡くなった兵士の埋葬場所については、「朝鮮北部地域に残された日本人遺骨の収容と墓参を求める遺族の連絡会」（「北遺族連絡会」）公式ウェブサイト「三合里埋葬地調査」の項が詳しい。（http://www.kitaizokurenrakukai.org/untitled-c ３zf）



【図６】
寺島絢一氏からの手紙［１］



【図７】
坂實氏からの手紙

によれば、1946（昭和21）年７月に突然1,500名のシベリアからの逆送組が同収容所に到着し、到着早々に息を引き取る者、危篤状態に陥る者等が続出したという。この後、８月までに7,500名の患者が送られたが、極度の栄養不足で衰弱しきった患者が多いことに加え、収容所ではコレラなどが蔓延したため、1,353名もの患者が死亡する悲劇が起こったことが、同書に記されている。

三合里・秋乙収容所は1946（昭和21）年12月に閉鎖され、収容所の抑留者は順次帰国が許されたが、小島氏の復員には時間がかかり、興南捕虜収容所（現朝鮮民主主義人民共和国咸興市興南区域）に移り、1947（昭和22）年５月に帰国を果たす。この間、内地の家族に安否や状況を伝える手段は無かったと考えられる。このため、小島氏は先に復員する抑留仲間に家族への伝言を頼んだことが推察される。寄贈資料には、抑留仲間から小島氏の家族に送られた小島氏の安否に関する葉書や書簡が複数存在しており、その一部を以下に紹介する。

寺島絢一氏（福島県在住）からの手紙［１］
（資料No.10）【図６】

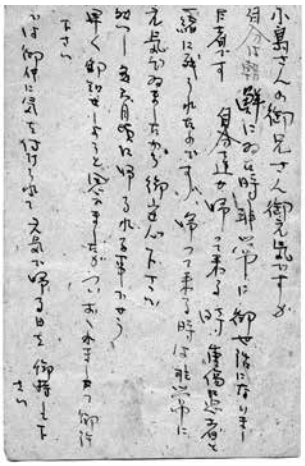
送付年月日不詳

前略御免下さい
小島武雄殿は現在興南（北鮮）陸軍病院にて元気で勤務して居ります　兄上様を始め皆様何卒御安心下さい　小生こと停戦以来行動を共に致し乗船地興南迄一緒に参りましたのですが重症患者が一部輸送出来ませぬので残留されました　而し御本人は最後の御奉公と明朗に頑張って居りますれば呉々も御心配なく停戦と同時に平壌三合里収容所に入り以後患者収容所勤務、本年一月一日興南に向かって出発、病院勤務中です　取急ぎ御一報迄　佐世保にて

坂實氏（千葉県在住）からの手紙
（資料No.11）【図７】

送付年：昭和22年４月６日（消印）

小生、武雄君とは朝鮮、平壌郊外の捕虜収容所にて、一緒に勤務致して居りましたものですが、武雄君は重症患者を看護する為、最後の帰還に廻られ、現在、ソ領、ポセトー軍港に居られる事と思ひますが、後、三ヶ月で帰すとソ軍の令がありましたし、長くても、今年中には元気で帰られる事と思います。私は先に帰って参りましたが、これもソ軍の命令



【図８】
片島賢市氏からの手紙

【図９】
寺島絢一氏からの手紙［２］

で止むを得ず、別れて参りました。我々衛生部員は、筋肉労働はやりませんから、捕虜としては、一番楽なものでした。では取急ぎ一筆お知らせ致します。

片島賢市氏（福岡県在住）からの手紙（資料No.13）【図８】

送付年：昭和22年４月18日（消印）

小島さんの御兄さん御元気ですか
自分は朝鮮にいた時非常に御世話になりました者です　自分達が帰って来る時重傷患者と一緒に残られたのですが、帰って来る時は非常に元気でいましたから御安心下さい
然し五六月頃に帰られる事でせう
早く御知せしようと思ひましたがついおくれまして御許下さい
では御体に気を付けられて元気で帰る日を御待して下さい

これらの資料からは、一人ではなく複数の抑留仲間から、小島氏の家族に宛てて手紙が届けられたことがわかる。小島氏が切実な想いで確実に家族に生存と帰国の情報を伝えようと努力し、仲間達もその想いに答えていたことがわかる。特に福島県の寺島絢一氏は、復員直後の佐世保引揚援護局で復員手続きを取るさなかに手紙を出しており、一刻も早く家族に無事を知らせようと尽力していたことが推測できる。寺島氏は、佐世保から故郷に戻ったのち、改めて小島氏の抑留状況と帰国時期の予測について以下のような詳細な手紙を送っている。

寺島絢一氏（福島県在住）からの手紙［２］（資料No.12）【図９】

送付年：昭和22年４月９日

拝啓　佐世保よりの葉書届きましたでせうか
さぞ皆様鶴首して御舎弟様の動静をお待ちの事と存じ上陸早々簡単にお知らせ致した次第です
尚佐世保援護局を通し大略報告済みなれば其の内公式に通報あること丶は思ひます　或は近在の戦友より既に詳細に亘ってお聞き済みかとも思ひますが今一度お知らせ致します
武雄殿は現在至極元気です　其の点御安心下さい
思へば終戦の年九月四日より北鮮部隊、満州部隊の一部は三合里収容所（平壌より約六里の山奥）に集結、収容所生活が始まりました

時の兵数約三万、（其の内約九割はシベリア行）給養其の他の関係で患者が続発せし為患者収容所を開設、要員として選抜され、以来病院と同様衛生勤務に従事して参りました
二十一年五月頃、部隊の移動に伴ひ栗里収容所に移動（平壌より約一里半）同勤務本年一月一日内地帰還の命に依り乗船地興南に移り船の来るのを待って居りました　其の間勿論〇〇の事とて十分な給養はありませんがお互励し合ひ健康に留意しつつ時には演芸会或は野球等行ひ慰め合ひ乍ら帰国の日を期待して居りました
愈々待望の日三月と決定せるも輸送不可能の患者が居る為重患約百五十名、衛生部員約六十名残留するこゝなり武雄殿は敢然として最後の大任完遂の為異国の地に踏み止まることになりました
出発時の話に依れば、残留者全部、去る三月二十二日頃ウラヂオ方向移動、既に開始されあるシベリア方面引揚と合流帰国とのことで準備を急いで居りました
一日も早くお知らせをと心は急ぎつゝも儘ならぬ佐世保に九日間滞在せし為遂今日迄遅延致せし事ご了承下さい　さぞ長い間御心配された事と思います
而し快報に接するのも近々の事と期待して居ります　では一日も早く御帰りなされんことを祈りつゝ擱筆致します
右乱筆を以てお知らせ迄　呉々も御自愛下さい
四月九日　敬具

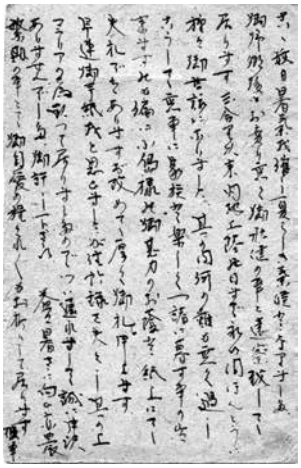
この資料から、三合里収容所時代の小島氏の活動が詳細に把握できる。平壌で武装解除を受け、三合里に収容された３万名の兵士の内、大多数がシベリヤに送られたが、「給養其の他の関係」で患者が続出したため、患者収容所が開設され、小島氏はこの施設で患者の看護にあたっていたことがわかる。また、1946（昭和21）年５月頃に栗里収容所に移動と記されているが、栗里収容所は秋乙収容所の別名であり、健康を取り戻した患者の収容先であったことが『三合里収容所小史』に記されている。この後、1947（昭和22）年１月に興南捕虜収容所に移るが、ここでは、「十分な給養」がないとしつつも、沖縄の捕虜収容所での吉川氏の事例と同様、「演芸会或は野球等」などが娯楽として行われたことなど、比較的、捕虜を取り巻く環境が緩和したことが読み取れる。小島氏の復員が遅れた理由については、先に紹介した他の仲間からの手紙の内容通り、輸送不可能な重症患者の看護にあたるためと記されており、最後まで患者の面倒を小島氏が看ていたために復員が遅れたことが把握できる。この手紙からは、単純に小島氏の安否を伝えるのみならず、家族に抑留生活の詳細を伝えようとする仲間の強い信頼関係を読み取ることができるだろう。

小島氏は最終的にソ連ナホトカ港より舞鶴港へ上陸して復員する。寄贈資料には厚生省舞鶴引揚援護局が発行した「引揚証明書」があり、本資料から小島氏が1947（昭和22）年５月15日に復員したことが把握できる。抑留仲間からの手紙にも５、６月頃の復員を予想している内容のものがあり、家族に正確な情報が伝えられていたことがわかる。小島氏が復員した後も、抑留仲間との連絡は途絶えることがなく、全国各地の仲間から複数の便りが送られている。寄贈資料にも５点の手紙が含まれており、その内容について以下に紹介する。

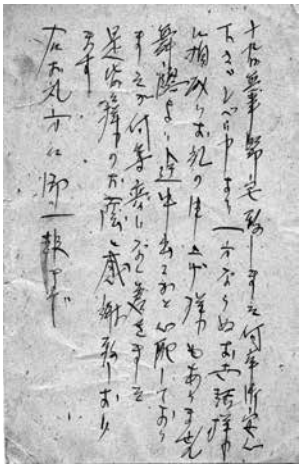
石川重規氏（愛知県在住）からの手紙（資料No.21）【図10】

送付年月日不詳

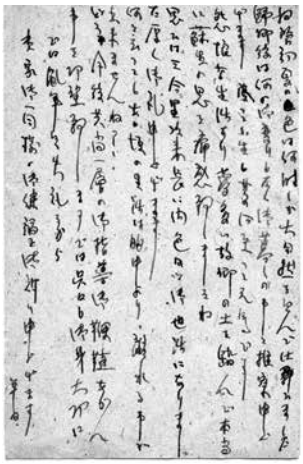
こゝ数日暑気を催し夏らしき気候となりました
御帰郷後もお変り無く御壮健の事と遠察致して居ります　三合里以来内地上陸の日まで永い間ほんとうに種々御世話になりました　其



【図 10】
石川重規氏からの手紙



【図 11】
猪川功氏からの手紙



【図 12】
市川善一氏からの手紙

の間何の難も無く過しこうして無事に家族と楽しく一緒に暮す事の出来ますのも偏に小島様の御甚力のお陰と紙上にて失礼ではありますが改めて厚く御礼申上ます
早速御手紙をと思ひましたが住所録を失くし其の上マラリアの為臥って居りましたのでつい遅れまして誠に申訳ありませんでした　御許し下さい　益々暑さに向ひ亦農繁期の事とて御自愛の程くれ〳〵もお祈りして居ります

擱筆

猪川功氏（愛媛県）からの手紙
（資料No.22）【図11】

送付年月日不詳

十九日無事帰宅致しました　何卒御安心下さい　シベリヤより一方ならぬお世話様に相成りお礼の申上げ様もありません　舞鶴より途中出るかと心配しておりましたが何等変りなく着きました　是皆様のお陰と感謝致しおります
右お礼方に御一報まで

市川善一氏（茨城県在住）からの手紙
（資料No.15）【図12】

送付年：昭和22年６月１日（消印）

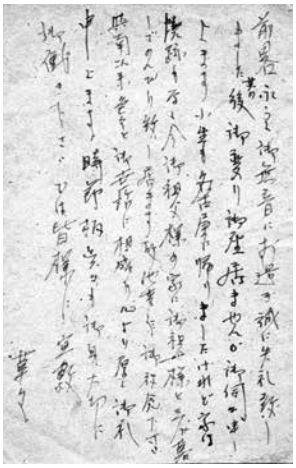
拝啓初夏の色は何時しか大自然を包んで仕舞いました　帰郷後は何の御変りもなく御暮しの事と推察申上げます　改って小生も其后至って元気です
怨恨な生活より夢多い故郷の土を踏んで本当に蘇生の思を痛感致しましたね
思ひは三合里以来長い間色々御世話になりました厚く御礼申上げます
何と云ってもあの頃の生活は胸中より離れる事が出来ませんね？
どうか今後共尚一層の御指導御鞭撻あらん事を切望致します　では呉々も御身大切に
では乱筆にて失礼ながら
貴家御一同様の御健福を御祈り申上げます

草々

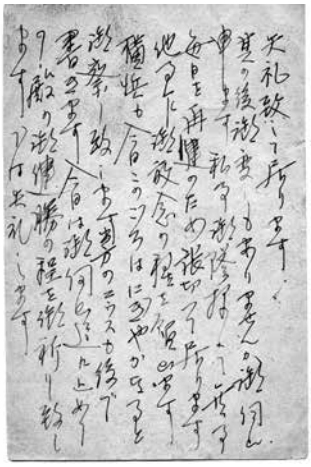
本田正治氏（愛知県在住）からの便り
（資料No.17）【図13】

送付年：昭和22年６月28日

前略永らく御無音に打過ぎ誠に失礼致しました　其の後御変り御座居ませんか　御伺ひ申上ます　小生も名古屋に帰りましたけれど家は焼跡もなく今御祖父様の家に御祖母様と三



【図 13】
本田正治氏からの便り



【図 14】
苗代澤耕作氏からの手紙

人暮しでのんびり致し居ます故他事乍御放念下さい　興南以来色々と御世話に相成り心より厚く御礼申上ます　時節柄呉々も御身大切に御働き下さい　では皆様に宜敷　　草々

苗代澤耕作氏（岩手県在住）からの手紙（資料No.20）【図14】

送付年：昭和22年８月29日（消印）

失礼致して居ります
其の後御変もありませんか　御伺ひ申します
私事御蔭様にて無事毎日を再建のため張切って居ります　他事乍御放念の程を願ひます
横浜も今日このごろはにぎやかな事と御察し致します　当方のニウスも後で書きます　今日は御伺ひ迄に止めて貴殿の御健勝の程を御祈り致します　では失礼します

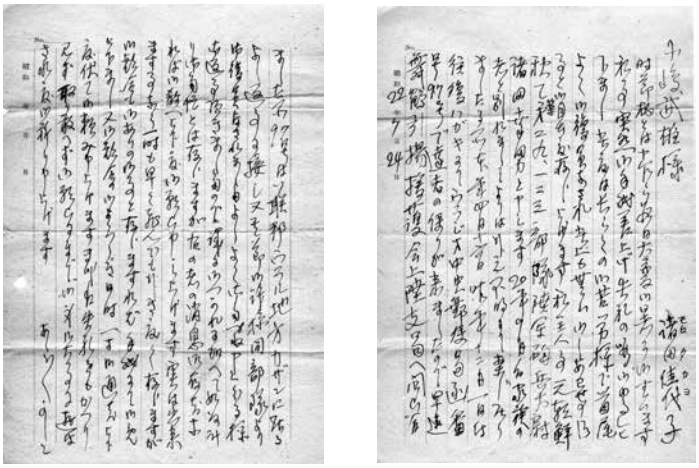
これらの手紙の多くには、三合里収容所時代に小島氏に世話になった感謝の気持ちが綴られているが、送り主は小島氏の同僚のほかに、小島氏が看護した患者も含まれていることが推測できる。猪川氏の手紙には「怨悢な生活より夢い故郷の土を踏んで本当に蘇生の思を痛感致しましたね」、「何と云ってもあの頃の生活は胸中より離れることが出来ませんね？」などの記述があり、過酷な抑留生活を振り返る内容も含まれていることが興味深い。また、本田氏や苗代澤氏の便りからは、戦争被害を受けた地域の復興に向かう強い意思を感じることができる。

復員した小島氏に対し、同じ部隊に所属していた家族の消息を尋ねる便りが寄贈資料に含まれている。以下にその内容を紹介する。

諸田佳代子氏（東京都在住）からの手紙（資料No.18）【図15】

発送年：昭和22年７月24日

時節柄とは申乍ら数日大変御暑う御座います
私事突然御手紙差上げ失礼の段御ゆるし被下まし　此度は長らくの御苦労様で首尾よく御復員なされ　此上も無い御しあわせの御事と御目出度存じ上げます　私主人事元朝鮮秋乙第二九、一二三部隊陸軍砲兵大尉諸田幸男と申します　20年９月１日家族の者と別れましてよりは行え不明にて案じ居りましたる所本年四月十六日昨年十二月一日付往復ハガキにてウラジオ中央郵便局函番号97号で達者の便りが来ましたので早速舞鶴引揚援護会上陸支局へ問ひ合ました所97号はソ連邦ウラル地方



【図 15】
諸田佳代子氏からの手紙

カザンに居るよし返事に接し亦其節御許様同部隊より御復員なされましたよしよく御たづね申上ぐる様御返事頂きましたので誠におつかれに加へて如何計り御多忙とは存じますが右の者の消息御存知なれば御教へ被下度御願ひ申し上げます　実は出来ます事なら一時も早く飛んでも行き度く存じますが御都合も御ありの御事と存じますれば手紙にて御免被下まし又御都合の御よろしき日時一寸御通知被下度伏て御頼み申上げます　まづは失礼をもかへり見ず取り敢へず御願ひ事まで　御身御大事に遊ばされ度御祈り申し上げます

あら〳〵かしこ

この手紙には、敗戦後の1945（昭和20）年９月以降、行方がわからなくなった諸田氏の夫から、1947（昭和22）年４月16日に無事を知らせる便りが届き、舞鶴引揚援護会に発信元を問い合わせたところ、夫と同じ部隊に小島氏が所属していたことがわかり、消息を知りたいという内容が記されている。「実は出来ます事なら一時も早く飛んでも行き度く存じますが」という一文から、一刻も早く夫の無事を確認したいという諸田氏の強い想いを感じることが出来る。

小島氏がこの問合せにどのように回答したのかは不明であるが、本資料が廃棄されずに保存されていることから、丁寧な回答が送られたことと思われる。このように、ソ連軍の捕虜となり、過酷な抑留生活の後に復員した人々は、帰国後、未帰還の抑留者のために様々な情報伝達等の配慮を留守家族に行っていたことが本資料から把握できる。小島氏は復員後、株式会社東芝に復職して労働衛生管理関係の勤務を勤めた。戦後、小島氏は家族に戦争体験を語ることはなかったといわれるが、陸軍衛生兵として二度にわたり出征し、抑留生活を送った小島氏の資料は、横浜市民の戦争体験を後世に伝える貴重な資料群であるといえるだろう。

● おわりに

吉川氏、小島氏両氏の資料とも、公的な情報を記載する資料のほか、戦友や捕虜仲間からの私的な便りなど、様々な種類の資料があり、戦地や捕虜生活の一端に触れる貴重な資料であるといえる。両氏の資料から共通に読み取れるのは、戦地で得た戦友や捕虜仲間などの関係性の深さであり、日本軍が敗戦によって解体された後も、継続して家族に対する安否情報や、無事を伝える連絡を取り合っていたことがわかる。公的な戦史記録からは把握することの出来ない、兵士間の感情を知るうえで極めて重要な資料といえよう。

戦争体験者の戦地での体験や戦争に対する受け止め方は、多種多様であるといわれており、より多くの事例を収集し比較・検討することが、後世に正しく戦争の記憶を伝えるために必要不可欠であるといえる。証言記録を体験者当人から直接聞き取ることが困難な時代に入り、残された資料から把握できる情報を周辺資料の情報も含めて分析することは、今後より重要な研究手法になることは明白である。当館では引き続き、所蔵資料や新規寄贈資料から、横浜市民の戦争体験について調査・分析を進めていく予定である。

最後に、貴重な資料をご寄贈くださった吉川一俊氏と岩田みどり氏にこの場を借りて感謝申し上げます。また、本稿の執筆に当たり、吉川一俊氏および吉川氏のご家族と岩田みどり氏に多くのご教示をいただきました。合わせて感謝申し上げます。

吉川歳雄家資料目録（吉川一俊氏寄贈）

[凡例]

（1）資料名のうち原題を欠く場合は適宜［　］を付して仮題をつけた。また、原題・仮題のままでは内容がわかりにくい場合は（　）内に適宜補った。
（2）作成・宛先について本文から判明・推測できるものについては［　］を付した。
（3）年代は元号とアラビア数字を組み合わせる表記に統一（変更）した。
（4）年代は原則として資料の作成（刊行）年月日をとり、本文から年代が判明・推測できるものについては［　］を付した。
（5）本目録に収録した資料の閲覧等については事前に横浜都市発展記念館（連絡先は奥付参照）まで問合せられたい。なお、目録に掲載されているが、個人情報保護、資料の状態から閲覧が不可能な資料もある。

資料番号	資料区分	資料名	年代	作成	宛先	点数	備考
1	文書	商品通	大正 11 年 7 月	米穀薪炭荒物商 宮崎商店	吉川様	1	
2	文書	卒業証書 （根岸尋常小学校）	昭和 9 年 3 月 24 日	横浜市根岸尋常高等小学校長正八位木村政廣	吉川歳雄	1	
3	文書	賞状 （森永キャラメル芸術募集関東地方予選結果優秀に付）	昭和 9 年 9 月	森永製菓株式会社学芸部	吉川歳雄	1	
4	文書	卒業証書 （根岸尋常高等小学校）	昭和 11 年 3 月 27 日	横浜市根岸尋常高等小学校長正八位木村政廣	吉川歳雄	1	
5	文書	體力手帳	昭和 15 年 11 月 28 日	厚生省	吉川歳雄	1	
6	文書	青年学校手帳	昭和 15 ～ 16 年	吉川歳雄		1	
7	文書	一般職業能力申告票控	昭和 15 年 11 月 3 日	職業紹介所	吉川歳雄	1	
8	文書	一般職業能力申告票、控	昭和 16 年 11 月 3 日	國民職業指導所	吉川歳雄	2	
9	文書	［徴兵籤札・氏名票］		甲府連隊区司令部	吉川廣吉	1	
10	文書	［徴兵籤札・氏名票］	［昭和 16 年］	［甲府連隊区司令部］	吉川歳雄	1	
11	文書	軍隊手帳	昭和 17 ～ 20 年	吉川歳雄		1	
12	文書	所持証明書		歩兵第三十連隊長 富澤國松	陸軍上等兵　吉川歳雄	1	台紙貼付。
13	文書	病状経過申立書 （様式）				1	裏面に書込有「横浜市南区共進町二ノ四四　神奈川県傷痍軍人会本部」。
14	文書	善行證書		歩兵第三十連隊長 陸軍大佐　富澤國松	歩兵第三十連隊 第五中隊陸軍兵長 吉川歳雄	1	台紙貼付。
15	文書	賞状 （銃剣術競技会に於て成績優秀に付）		満州第一七七部隊分田隊長 陸軍大尉　分田拓磨	陸軍一等兵　吉川歳雄	1	
16	文書	陸軍下士官適任證書		歩兵第三十連隊長 陸軍大佐　富澤國松	陸軍兵長　吉川歳雄	1	台紙貼付。
17	文書	『JAPANESE PHRASE BOOK』	昭和 19 年 2 月 28 日	WAR DEPARTMENT		1	米陸軍省発行の英日辞典。吉川氏が沖縄で米兵から贈られたもの。
18	文書	感謝状 （納税組合長としての功を謝す）	昭和 19 年 11 月 3 日	東京財務局長 池田勇人 横浜市長　半井清	横浜市磯子区瀧頭銀座 納税組合組合長 吉川寅松	1	
19	文書	感謝状 （建物疎開の円滑な遂行に寄与した件に付）	昭和 19 年 12 月 28 日	横浜市長　半井清	磯子区瀧頭岡町内会 副会長　吉川寅松	1	
20	文書	功績名簿、現認証明書（綴）	昭和 16 ～ 20 年	陸軍中尉　横田善龍 陸軍准尉　青木正雄	吉川歳雄	12	功績名簿（甲）3 点、功績名簿（乙）6 点、現認証明書 3 点。
21	文書	現認証明書	昭和 20 年 4 月 21 日	陸軍中尉　横田善龍 陸軍准尉　青木正雄	吉川歳雄	1	台紙貼付。
22	文書	［捕虜生活メモ］	昭和 21 年頃	吉川歳雄		1	捕虜仲間からのメッセージ、英会話メモ、歌謡曲の歌詞と楽譜などが記載されている。女形に扮した吉川氏の姿を描いた絵画 1 点有。

資料番号	資料区分	資料名	年代	作成	宛先	点数	備考
23	文書	［引揚船乗船メモ］	［昭和 21 年 12 月］	［吉川歳雄］		1	復員船と思われる船の出船情報などを記したメモ。
24	文書	引揚証明書	昭和 21 年 12 月 29 日	名古屋引揚援護局長	吉川歳雄	1	台紙貼付。
25	文書	復員証明書	昭和 21 年 12 月 29 日	歩兵第三十連隊長 陸軍大佐　富澤國松	吉川歳雄	1	台紙貼付。
26	文書	復員証明書		歩兵第三十連隊長 陸軍大佐　富澤國松	吉川歳雄	1	台紙貼付。
27	文書	復員証明書、発疹チフス・コレラ予防注射完了証明書	昭和 21 年 12 月	名古屋上陸地支局長 名古屋引揚援護局長	吉川歳雄	1	台紙貼付。
28	文書	［葉書］ (復員の便りの礼状)	昭和 22 年 1 月 14 日	埼玉県北足立郡朝霞町 伊東末蔵	横浜市港北区中山町 吉川歳雄	1	
29	文書	［葉書］ (無事の帰還を喜ぶ)	昭和 22 年 1 月 14 日	埼玉県川越市 北川房次	横浜市港北区中山町 吉川歳雄	1	
30	文書	［葉書］ (復員後の生活について)	昭和 22 年 1 月 14 日	愛媛県温泉郡東中島村 城戸伝	横浜市港北区中山町 吉川歳雄	1	
31	文書	軍歴申立書	［戦後］	［神奈川県］		1	記載例 1 点、用紙 2 点。
32	文書	裁定通知書 (陸軍軍人一時恩給)	昭和 52 年 2 月 23 日	総理府恩給局長	吉川歳雄	1	
33	文書	慰労状 (旧軍人の労苦に対して)	平成 7 年 11 月 22 日	内閣総理大臣 村山富市	吉川歳雄	1	
34	文書	［絵葉書］ (ハルピンの町並)		満州国浜江省哈爾浜満州第一七七部隊横田隊 吉川歳雄	横浜市磯子区瀧頭町 吉川寅松	7	封筒 1 点に 6 点絵葉書封入。
35	文書	『標準軍歌集』	昭和 16 年 5 月改訂再版	今村嘉吉作、志村文蔵編、野ばら社発行		1	
36	文書	『新選いろは字引大全』	明治 30 年 8 月 11 日	松下照義著、服部喜大郎発行		1	
37	文書	『帝國いろは字引』	明治 31 年 2 月 1 日	片谷耕作編、岡村庄兵衛発行		1	
38	文書	『歩兵操典草案』	昭和 12 年 6 月 8 日	小島棟吉翻刻、武揚堂書店発行		1	
39	文書	『皇軍慰問　銃後と戦線を結ぶ娯楽全集』	昭和 17 年 12 月 25 日	米田勝治編、米田商会発行		1	
40	文書	昭和 20 年 8 月 15 日付 『讀賣新聞』 (複製版：文藝春秋附録)	昭和 27 年 6 月 5 日発行	文藝春秋社		1	
41	文書	『宇宙に挑むアメリカ』	昭和 41 年 5 月 1 日	アメリカ大使館出版部発行		1	
42	文書	『ハルピン一七七部隊五中隊戦友消息』	平成元年 9 月			1	吉川氏が所属した部隊の記念誌、部隊員による回想が多数収録されている。
43	紙票類	開港 110 年みなと祭記念乗車券	昭和 43 年 6 月 1 日～3 日	横浜市交通局		1	使用済
44	紙票類	田園都市線開通記念乗車券	昭和 43 年 4 月 1 日	東京急行		4	溝の口⇔長津田間 1 点、長津田⇔つくし野間 3 点。
45	紙票類	オリンピック東京大会記念 電車回数乗車券	昭和 39 年 10 月	横浜市交通局		1	
46	紙票類	オリンピック東京大会記念 自動車 1 区乗車券	昭和 39 年 10 月	横浜市交通局		2	
47	紙票類	オリンピック東京大会記念 電車普通乗車券	昭和 39 年 10 月	横浜市交通局		2	
48	紙票類	オリンピック東京大会記念 バス普通乗車券	昭和 39 年 10 月	横浜市交通局		1	
49	紙票類	［下敷き］ 神奈川県民歌「光あらたに」				1	
50	遺物	寄せ書き日の丸			吉川歳雄	1	
51	遺物	千人針				1	吉川氏が戦地より持ち帰ったもの、十銭玉 1 点縫付有。
52	遺物	ゲートル				2	
53	遺物	十徳ナイフ				1	沖縄の捕虜生活時代に米兵から吉川氏に送られたもの。

資料番号	資料区分	資料名	年代	作成	宛先	点数	備考
54	遺物	天秤計				1	薬品の重量を計る用途で用いられたもの。
55	遺物	巻尺				1	足の大きさを計測する用途で用いられたもの。
56	遺物	折尺				1	製靴用の道具
57	遺物	ものさし				1	製靴用の道具
58	遺物	そろばん				1	製靴用の道具
59	遺物	製靴用ハンマー				1	製靴用の道具
60	遺物	ワニ（製靴用道具）				1	製靴用の道具

小島武雄家資料目録（岩田みどり氏寄贈）

［凡例］記載事項、閲覧条件は吉川歳雄家資料目録の凡例を参照されたい。

資料番号	資料区分	資料名	年代	作成	宛先	点数	備考
1	文書	履歴書（軍務関係）		小島武雄		3	1 通は朱書で訂正あり。付箋「軍隊手帳焼却に付き細部不明」貼付。
2	文書	［封書］ （武雄の父の死を悼むが、出征中のため落胆しないよう申し聞かせたこと）	昭和 15 年 11 月 18 日	三宅部隊長　三宅惣八郎	横浜市港北区小机町 小島長吉	1	封筒欠。
3	文書	昭和十六年七月支那事変第四周年記念絵葉書帖	昭和 16 年 7 月	陸軍恤兵部、 株式会社芳賀洋紙店謹製		1	
4	文書	渡支事由證明願・証明書	昭和17年10月19日願、 10 月 23 日証明書交付	保証人：岡本一夫	在太原日本総領事館 警察署長	1	
5	文書	［給料袋一括］	昭和 18 年 2 月～ 19 年 3 月			15	
6	文書	渡支身分証明書下付願・渡支事由証明願（写）	昭和 18 年 3 月	小島武雄	神奈川警察署長	1	
7	文書	［電報］ （「ツゴウニヨリサイヨウセヌアトフミ」）	昭和 18 年 3 月 20 日	タグチウマシ	コジマタケオ	1	
8	文書	練習員手当通知	昭和 18 年 1 月 23 日	東京芝浦電気株式会社 支社人事課	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
9	文書	練習員手当通知	昭和 18 年 5 月 1 日	東京芝浦電気株式会社 支社人事課	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
10	文書	［葉書］ （武雄が無事で興南陸軍病院で勤務していること）		福島県相馬郡新地村 寺島絢一	横浜市港北区小机町 小島長吉	1	
11	文書	［葉書］ （ソ連の捕虜になった武雄が今年中には帰還できるであろうこと）	昭和 22 年 4 月 6 日	千葉県香取郡佐原町 坂實	横浜市港北区小机町 小島長吉	1	
12	文書	［封書］ （武雄の抑留生活の様子と復員予定について）	昭和 22 年 4 月 9 日	福島県相馬郡新地村 寺島絢一	横浜市港北区小机町 小島長吉	1	
13	文書	［葉書］ （武雄の復員予定について）	昭和 22 年 4 月 18 日	福岡県飯塚市 片島賢市	横浜市港北区小机町 小島長吉	1	
14	文書	引揚証明書	昭和 22 年 5 月 15 日	厚生省舞鶴引揚援護局	小島武雄	1	
15	文書	［葉書］ （三合里以来お世話になったお礼）	昭和 22 年 6 月 1 日	茨城県筑波郡十和村 市川善一	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
16	文書	［封書］ （工場復旧が困難なため自宅待機を願う）	昭和 22 年 6 月 15 日	東京芝浦電気株式会社 鶴見工場第二勤務課	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
17	文書	［葉書］ （興南以来お世話になったお礼）	昭和 22 年 6 月 28 日	愛知県半田市 本田正治	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	

資料番号	資料区分	資料名	年代	作成	宛先	点数	備考
18	文書	[封書] (ソ連に抑留された夫の消息について)	昭和 22 年 7 月 24 日	東京都世田谷区 諸田佳代子	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
19	文書	[給与明細]	昭和 22 年 8 月 2 日	東京芝浦電気株式会社	小島武雄	2	
20	文書	[葉書] (無事毎日を再建のため張切っております)	昭和 22 年 8 月 29 日	岩手県九戸郡大野村 苗代澤耕作	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	日付は消印による。
21	文書	[葉書] (三合里以来内地上陸までお世話になったお礼)		愛知県碧海群高浜町 石川重規	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
22	文書	[葉書] (無事帰宅の報告とお礼)		愛媛県宇摩郡 猪川功	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
23	文書	[葉書] (復員帰郷の知らせ)		田端三郎	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	
24	文書	[封筒]		内閣恩給局	横浜市港北区小机町 小島武雄	1	封筒のみ。
25	文書	佐久間隊の思ひ出		[佐久間隊]		1	佐久間隊員による隊務の思い出、和歌、詩などが綴られた冊子。写真 39 点所収。
26	文書	[寄せ書] (除隊記念)	昭和 17 年 11 月	第八病棟	小島武雄	1	
27	文書	[皇居鳥瞰図]				1	
28	文書	瓦斯防護必携　第 1 巻 (一般兵用)	昭和 13 年 11 月	教育総監部		1	裏表紙欠。書込有。
29	文書	輝く帰還兵のために 第四版	昭和 15 年 4 月	陸軍情報部		1	
30	文書	戦陣訓		日出づる國社発行		1	
31	写真	[写真] (部隊集合写真)				1	
32	写真	[アルバム] 大陸の想い出				1	佐久間隊関係写真。北支山西省で結成された神奈川県人会集合写真有。
33	写真	[アルバム] 思出		小島方作		1	
34	遺物	勲七等瑞宝章				1	
35	遺物	勲八等白色桐葉章				1	
36	遺物	支那事変従軍記章				1	